(1)身体障害児の教育及び社会的自立に関する研究

——主にサリドマイド児等上肢障害児を中心に——

分担研究者　手塚直樹
（茨城大学教育学部）

1. 研究の目的と経過

「サリドマイド児等両上肢障害児の教育，職業，社会生活の実態と問題点をとらえ，将来に対する具体的方策を研究する」ことを目的として継続して調査・研究を実施し今年は第4年度に入っている。

本研究委員会は過去においてサリドマイド児等両上肢障害児の職業に関する問題，教育に関する問題について調査・研究を行なってきた。特に具体的な問題を把握するとともに当面の課題について適切な援助をするため，サリドマイド児等両上肢障害児のキャンプや合宿訓練に参加し，また父母との懇談会を通してそれを実施してきた。その中でも当面する最も大きな課題であった中学進学問題については専門家の協力を得て具体的な手だてとすることもできた。

本年度の研究は，職業問題，進学問題をより具体的に拡大していくとともに，サリドマイド児等両上肢障害児の社会的自立——特に日常生活動作について更に深め，また生活全体にわたっての向上をはかっていく視点から，住居や日常生活環境，並びに衣服の課題を新にとり入れ，これらを総合して1人の子ども，1人の人間としての生活を高めていくうえの諸問題を究明することとした。

そのため，これらの実態と課題を総論的に先ずとらえ，それをもとに各ケースに焦点をあて，ケース事例研究方式で問題を深めることにした。

ケースの選定は，キャンプ等を通して実際に知ったサリドマイド児等上肢障害児のうち典型的なケースを選定した。対象者は東京在住及び近県のフォコメリアの児童である。

2. 調査・研究結果の概要

本年度の研究方法は各課題を先ず総論的にとらえ，そのうえにたってケースを中心に総合的に具体的にとらえていくケース事例方式によって調査・研究をすすめていくことにしたが，課題によってはいまだ総論の段階で，それを個々のケースにあてはめて研究するところまでいかなかったものもあるが，ここにその調査・研究結果の概要を報告しておきたい。

(1) 日常生活動作の訓練

両上肢障害児の現在及び将来の生活の中で最も基礎となるのは日常生活動作の自立である。家庭における日常生活動作及び学校における学習動作の中で，上肢障害が影響している動作を洗い出し，その全てにわたって各個人別の評価表を作成する必要のあることはすでに報告ずみ（昨年度研究報告）である。ここでは，その評価表を作成した結果，生活動作において実際に問題点が指摘された6名の両上肢障害児（全員フォコメリア）について，当該問題点解消を目的とした生活動作訓練を実施したので，その経過を通して得られた知見について簡単に報告する。

①日常生活動作及び学習動作に著しく問題点が存在するのはアメリア及びフォコメリアである。エクトロメリアについては著しい問題点は現在のところ存在しないが，将来の職

業生活を考慮すれば，巧緻性及び速度の向上が必要である。

②生活動作の中で最も問題点が存在するのは㋑更衣動作，㋺排泄動作（女子の生理動作を含む）㋩学習動作（書字及び器具操作）である。

③これらの動作を解決する基本的態度としては，手を初めとして口，顎，下肢，体幹など身体のあらゆる部位を総合的に使用することを第一とし，それで済まない場合には市販品を部分的に改良したものを使用し，特別に改良された自助具等の使用は最後に考える。

④衣服については，ボタンをマジックテープに変える。ファスナーにリングを付ける。ループを縫い付ける等の部分的改良をし，学生服やワイシャツ等は着用前にできるだけボタンをはめておき，頭からかぶって着るなどの着用法の工夫を併用することによって殆んど解決することが可能である。（なお，衣服については更に課題別として後述する）。

⑤排泄動作及び女子の生理動作にとっては，洋式便器が便利である。洋式便所では排泄時における脱衣，清拭，着衣が単独で可能である。生理の処理は特別に開発された生理帯を使用し，便器に腰掛けて行なうことができるが，上衣が全く使用できない場合にはこの方法では不可能である。

⑥書字動作については，現在のところ上肢を使って実用的であるが，上級学校に於て速度の点でやや問題が生じて来よう。

⑦器具操作では，巧緻性，速度の両面とも両上肢のみではかなり劣る。足で作業できる環境を整え，足指の巧緻性の訓練をする必要性が痛感される。

⑧両上肢障害児が将来，職業生活，家庭生活，社会生活を健常者に混って遂行して行くためには，幼少時から生活動作等をひとりでやり遂げていこうとする本人側の意欲と，低い学習机や洋式トイレなど必要最少限の整備を援助していこうとする環境側の配慮とがうまく相まっていくことが重要であると考えられる。

(2) 衣　服

着るもの，それがその人に与える影響は大きい，きちんとした身なりは自分自身への自信と周囲の人に好感を与える。

特にサリドマイド児等両上肢障害児の場合は，先天性の外表奇型があるのだから，他の障害者よりも増して身だしなみに心を配る必要がある。

①現時点ではまだ成長期であり，着脱動作ひとつをとっても何もかも便利でありすぎるというものは不適当であり，多少なりとも可能性を伸ばすのに役立つものでなくてはならない。

中学校の制服等の着脱に要する時間についての報告には，ほとんど心配する点が見られないのであるから，自分にうまく適応する衣服を選ぶ能力と自信をつけたならば，その上はほんの少しの改良を加えるだけで解決できるのではないかと思われる。

②手の代替機能を足に求める場合には，もちろん着るものも配慮が必要である。それだけでなく，身のこなしがスッキリしてみえる工夫がなされれば，人前で足を使うことがはばかられるような事態も少しはおこらないのではなかろうか。着るものの足元は，自分にとって見えやすく使いやすいもので，他人には見苦しくないような配慮をすることが必要である。

③雨の日は障害者全体の悩みであるが，雨イコール傘という観念をすてれば，雨衣の改良で軽減されるはずである。

④衣服やみだしなみやおしゃれは，その年令相応の体験の積み重ねが必要なので，その個人の生活の場にふさわしい年令相応の体験が必要である。

(3) 環境計画

両上肢障害児の日常生活を通じ，物的環境で考慮しなければならない事項のうち，いくつかを述べてみたい。

①器具，家具の周囲にスペースを必要とす

ることである。身体移動の必要性から，また衣服の着脱のために家具の上だけでなく隅，側面を利用したり，床面を利用する。

②特に問題になるのは便器であるが，ウオッシュエアシート，自動紙ふき器の使用も考慮される。

③上級学校への進学に伴なってますます学習環境が重要であるが，特に勉強机の改良については机上面を傾斜させて照明について十分考慮すること，また足による筆記については特別な机が必要である。

④ドアノブをレバーハンドルにする。即ちつかんでまわすというような動作は不可能，または困難であるので動作を簡単にする。

⑤スウィッチなどを大きくする。指先などを使用することを考えた器具は操作盤を大きくして，肘など身体の他の部分を使用して使えるようにする。

⑥使用する部分が他の部分よりも突出していること，たとえば彫込把手（ふすまによく使われる）などは使いにくい。ふすま面から突出しているものにかえることがよい。

⑦こうしたいくつかの共通的視点のうえにたって，個々のケースに適応した環境計画を具体的にすすめていくことが必要である。

(4) サリドマイド児の高校進学対策

①サリドマイド児の学習成績と上肢障害の影響

実技を主とした教科，体育（保健体育），図画工作（美術），家庭（技術，家庭）などにおいて，サリドマイド児が，本人の努力にかかわりなく低い評価しか受けられない。書字の速度が遅いので，学力検査の問題をこなし切れない，高校入試の際に特別な配慮を講じてほしいという保護者の声がある。

そこで，サリドマイド児の中で特に上肢障害の影響の顕著なフォコメリア児6名の事例を通して，若干検討を加えてみたい。

各教科の学習成績を各自の小学校6年3学期の「通知表」の評定でみると，「体育」は下位（5段階評定の「1」「2」）が3例あったが，「図画工作」「音楽」「家庭」はいずれも中位（同じく「3」）以上であり，必ずしもすべてが低い評価を受けているわけではない。6例の学習成績は概して良好であり，上肢障害の直接的な影響はさして認められない。

中学校における授業は教科担任制であり，評価の観点や方法も若干異なるが，いずれにしても評価者の個人的な見解が関与することは否めないであろう。

「国語」「算数」の標準学力検査の結果によると，「算数が極めて劣る」「国語，算数ともにやや劣る」各1例を除くと，いずれも「普通」以上で「国語，算数ともに極めて秀れている」が1例あった。従って，上肢障害が学力検査の結果に直接的に影響を及ぼしているとは考えられないものと思われる。

書字の速度については，学力検査の場面における観察と，書字速度調査（板書した漢字かなまぢり文をノートに書写する速度を小学5，6年生の対照群と比較するもの）の結果から，かなり個人差があるが，学力検査の問題をこなし切れないということはない。消しゴムの使用，書字の出来ばえについても特に問題はないものと思われる。

②高校進学対策

高校入試は，個人の思惑や事情を超えて，厳然と存在している。何人といえども，所期の目的を達成するためには，この過酷な競争に勝ち抜かなくてはならない。サリドマイド児の高校進学の問題は，特殊なものというよりは一般的なものとして，この障害に共通するものというよりは極めて個別的なものとしてとらえることが適当である。

現行の入試制度では，いわゆる「学力」がすべてに優先されており，サリドマイドによる上肢障害も，その限りにおいては副次的な要因でしかない。従って，何としても「学力」を身につけることが要請されるわけである。学年が進むにつれて，学習活動における諸動作でのハンディキャップがつのってくる

と予測される。フォコメリア児にとって，上肢だけではとてもおぼつかない動作がふんだんに出てくるに違いないが，身体機能，とりわけ足をフルに活用すること，自助具，治工具を工夫，導入すること，設備，器具を改良することなどによって，ひとつひとつ可能ならしめていくことが，とりもなおさず，これからの進路を切りひらいていくことになるのである。動作の不自由は専門的，技術的援助により，かなりのレベルまで改善，代替することが可能であることが予測されている。

高校入試は，実質的には中学校の進学指導，即ち学級担任の判断による志願校の振り分けの段階であらかた決まってしまうといわれている。とすれば，何はともあれ学級担任に日頃からよく相談して，見かけの障害と内なる能力とを的確に理解してもらっておくことが大切である。志願校の選定と学校に対する働きかけについては学級担任の力量と執念に負うところが大であるからである。

(5) 大学進学問題

サリドマイド児等両上肢障害児が将来，その大部分が大学へ進学することを予測して，昨年度の研究において，全国の大学における身体障害者の就学実態を含む身体障害者の大学進学問題について調査，研究し，大学というところが「入試制度」「環境」「講義」「学生生活」全体において，かなり保守的であり，身体障害者の受け入れには消極的であることがわかった。

こうした実態をふまえたうえで，サリドマイド等両上肢障害児の大学進学問題を更に深めていくことの必要性を認識したが，対象であるサリドマイド児が，当面は中学進学，高校進学が焦点であり，現時点で大学進学問題を個々のケースにあてはめて深めていくことは必ずしも適当でないので，本年の研究は主に高校進学対策にあったことと併せて，来年度以降の研究の中で具体的に大学進学問題をとらえていくことにした。したがって，本年度の研究においては特に進展した部分はなかった。

(6) 職業及び職業適性に関する問題

サリドマイド児等両上肢障害児の職業や本人のもつ適応能力等に関する問題については，特に第1年度において「上肢障害者の実態調査結果の検討」「行政施策の検討」「適職の検討」といろいろな面からの調査，研究をし，更に第2年度においては，全国に居住する両上肢障害者（主に切断者）の実態を訪問面接調査を実施して明らかにした。そうした調査，研究結果に基づいて，サリドマイド児等両上肢障害児の将来の職業について検討した時，将来の職業を現時点で想定することの危険性とむずかしさであった。

たしかに「身体障害者の職業問題」という一般的課題にそれを広げたときには，制度，施設等，あらゆる行政施策が問題となり，また現在の指導，訓練体制の不備が指摘できる。しかし，「サリドマイド児」又は「サリドマイド児等両上肢障害児」という限定された対象群に対する「職業問題」を研究していくとき，むしろ，個々の状況に対応した個別的な職業問題としてとらえていくことが，本研究としては効果もあり，サリドマイド児等両上肢障害児本人や家族にとっても具体的な援助ができ得るものと考えて，一般的状況，全般的課題を十分とらえたうえで，個々のケースにあてはめて検討することとした。

したがって，前述の選定されたケースに対する個別的な調査，研究をすすめたが，個別調査で最も必要とされる「科学的根拠に基づく機能のテスト」方法がなかなか見出せず，今年は十分な成果をあげることができなかったが，研究を継続していきたい。

3. 今後の方向

「日常生活動作及びそれに関連して衣服や生活環境計画」及び「高校進学対策」や「大学進学問題」更には「職業に関する諸問題」について更に調査，研究をすすめ，ケース事例を通して，サリドマイド児等両上肢障害児

にかかわる問題性と援助の具体的方策を明らかにし，「1人の子ども」「1人の人間」としての生活と成長を，より高めていくための検討を更にすすめていきたい。

研究協力者

大　瀧　憲　一

樫　木　八重子　　西　村　晋　二

加　藤　博　臣　　野　村　　歓

河　合　久　治　　原　田　豊　治

渋　沢　　久　　星　野　昌　哉

沢　　治　子　　三ツ木　任　一

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1.研究の目的と経過

「サリドマイド児等両上肢障害児の教育,職業,社会生活の実態と問題点をとらえ,将来に対する具体的方策を研究する」ことを目的として継続して調査・研究を実施し今年は第4年度に入っている。

本研究委員会は過去においてサリドマイド児等両上肢障害児の職業に関する問題,教育に関する問題について調査・研究を行なってきた。特に具体的な問題を把握するとともに当面の課題について適切な援助をするため,サリドマイド児等両上肢障害児のキャンプや合宿訓練に参加し,また父母との懇談会を通してそれを実施してきた。その中でも当面する最も大きな課題であった中学進学問題については専門家の協力を得て具体的な手だてとすることもできた。